授業内での発言を妨げる要因の検討
－「自由に発言できる教室」を目指して－

専　攻　　人間発達教育
コース　　教育コミュニケーション
学籍番号　M18012E
氏　名　　畑中　敬子

問題の所在と本研究の目的

授業を行う上で、活気のある教室を作りたいと望む教師は少なくない。或いは静かに行儀よく進む授業を好む教師もいるかもしれない。だが、「教育」という形のコミュニケーションを取る際に、学生が理解しているかどうか教える側が全く感じられない無反応な授業を望む教師はほぼいないだろう。授業を受ける側にしても、緊張感と静けさのみに包まれた授業は息苦しいのではないか。

しかし現実には、質問に対し誰も発言をしない静まり返った光景は教室の中で頻繁に見受けられる。発言には様々な意義があり、特に語学を学ぶ上では発言することの位置づけは非常に重要である。このような状況の中で、学生の発言を妨げているものが何なのかを探ることは、今後、学生の発言を促していく上で不可欠であると考えられる。

そこで、本研究では「授業内の発言」というものを、当事者である学生が実際のところどのように捉えているのかをインタビューによって明らかにし、学生の発言を妨げている要因を検討することを目的とする。更に、そこから学生の実態に沿った発言を促すための糸口を探りたい。

調査

1. 手続き　学生を対象に半構造化形式のインタビューを実施した。インタビューの際の観点としては、以下の 4 点を設定した。

Ⅰ 学生自身の発言に対する考え方
Ⅱ 学生自身の誤答や失敗に対する捉え方
Ⅲ 誤答時の教師の対応とその捉え方
Ⅳ 誤答や失敗に対する学生、教師双方のネガティブな反応の緩和・発言の促進

これらの観点に基づいて、関連の質問も状況に応じて入れながら、発言に関することであれば何でも自由に述べてもらった。

2. 対象　大学生 10 名（男性 7 名，女性 3 名；日本人 6 名，中国人 2 名，韓国人 1 名，ネパール人 1 名）。全員、筆者の勤務先である私立大学の学生である。学年は 1 年生 5 名, 2 年生 1 名, 3 年生 3 名, 4 年生 1 名である。筆者の英語あるいは日本語の授業を受講している者に協力を依頼した。

3. 実施概要　インタビューの所要時間は 60 分～120 分程度である。実施期間は、2019 年 5 月～2020 年 3 月である。本音を率直に話してもらうために IC レコーダーは使用せず、内容をすべて手書きで記録した。

結果

1-1. 学生にとっての発言とは何か　発言することに意義を感じている学生は 8 名であった。彼らは、発言することを「学習内容を理解し、定着させることができる」「発言するために自分で考えるようになる」「コミュニケーションが成立して楽しい授業になる」などの授業に関するメリットに加えて、「先生への印象がよくなる」など授業内容に直接関係のないメリットにもつながるものと捉えていた。そのうち 5 名は「授業の進行が妨げられる」「自分が学習する上で不都合が生じる」「他の学生の発言の機会を奪う」などのデメリットにも言及していた。

1-2. 発言の抑制要因と促進要因　発言の抑制要因として、発言に抵抗がある学生からは、「無条件の拒絶反応」「誤答への不安」「まわりの目への意識」が、発言に抵抗がない学生からは「授業進行への配慮」、他の学生の機会を奪いたくない、発言する学生がいるので自分は発言しなくてもいいなどの「他の学生への意識」、シンキング・タイムを確保したいという「自分の学習ペースの優先」が

挙げられた。

主要な発言の促進要因としては、教室内の関係性に関する要因である「担当教師との関係性が良好であること」「親しい学生が多いクラスであること、発言をひろってくれる学生がいること」が挙げられた。

2-1. 学生の誤答のとらえ方　誤答することは上達につながったり記憶に残ったりするので「間違えるのはいいこと」と捉える肯定的な認識を持つ者、誤答することは「バカにされること」「やる気をなくすこと」だと否定的な認識を持つ者、誤答に対してどのように考えるかは「科目・教師」「問題のレベル」で変わるとした者があった。それぞれ肯定群、否定群、条件依存群としたところ、10 名中 5 名が肯定群、2 名が否定群、3 名が条件依存群に該当した。全体的に見ると、誤答を肯定的にとらえる学生（肯定群）は比較的多かった。

2-2. 誤答時の教師の対応とそのとらえ方　誤答時に学生が嫌だと感じた教師の対応として、「正解へのサポートがない」「誤答したことを咎められる」「その状況にずっととどまらせる」「誤答を明確にしない」「教師の不十分さを棚に上げる」が挙げられた。それに対して誤答時に良いと感じた教師の対応としては、「答えたことを尊重する」「正解に導く」「教室の場を明るくするコミュニケーションにする」が挙げられた。

考察

1. 学生にとっての授業中の発言とは　学生は「発言に意義を感じているから常に発言をする」というわけではなく、自分が発言することになんらかのメリットがあれば発言し、反対にデメリットがあるときは発言を控えるというように、自分の学習状況やまわりの学生の存在を考慮しながら発言行動を選択している可能性が示唆された。

発言に抵抗がある学生は、「まわりにどう思われるか」に基準を置いて発言しない選択をしていた。

一方で、発言に抵抗がない学生は、教師や他の学生の存在を考慮しながらも、それよりも授業の進行や自分の学習ペースなど「学びを潤滑に行う」ことを基準に考え、発言しない選択をしているようであった。教師からは学生の発言行動の有無しか見えないため、授業中の静まり返った光景を「発言する意志がない」と捉えがちである。しかし、個々の授業への参加の仕方は全く異なり、学ぶ意欲がない、あるいは発言を妨げるものがあるから発言しないのではなく、熱心であるが故に発言しないこともあると言えよう。

2. 学生にとっての誤答とは　誤答に対する捉え方が、実際の発言行動にどのような影響を及ぼすのかを検討したところ、肯定群は誤答によって発言が抑制されるとは考えにくかった。条件依存群は、はっきりした傾向は見られず、個々の条件が自分にとって重要かということが基準になるようであるため、誤答への抵抗や不安が「本人にとって」大きくなる場面では、やはり発言が抑制される可能性が示唆された。否定群の学生は、誤答を回避したいようであり、誤答への抵抗や不安が実際に発言を妨げていると考えられた。

また、教師が授業への参加を評価することで、学生の発言がうながされ居場所がつくられること、正解に導くことにより、学生がより深く誤答から学べること、誤答したときに教室の場を明るくすることで、学生の誤答に対する不安や抵抗感をやわらげ、発言を促すことが推察された。

今後の課題

今回のインタビューにおいては、かなり深く学生の本音を捉えることができた。しかし、一方で、インタビュイーが筆者の勤務先の大学生のみであり、非常に限られた学生を対象に得られた知見でもある。更に多様な学生の話を聞き取ることでサンプルの偏りを解消すると共に、教師にもインタビューを実施し、教師、学生双方の視線から検討することが必要であろう。更に、教師との関係性、他の学生との関係性は発言行動を規定する重要な要因であると考えられるため、実際に教室内で円滑なコミュニケーションが生じている授業がどのようになされているのかを検討し、実践に取り込んでいくことを目指していきたい。

主任指導教員　中間　玲子
指導教員　　中間　玲子